

ソーシャルアクション②

園長 児嶋 草次郎

被虐待児童の人生を救うため、地域貢献活動として、皆様の御協力をお願い致します。

今年は夏からこの秋にかけて台風も次々にやって来ましたが、その影響もあって雨が多く、大地の表土が乾燥するということがほとんどありませんでした。その結果、水田の稲刈り後のワラの回収ができずそのまま腐らしてしまい、畑の方では、雑草がすごい勢いで成長、8月末に植えたカボチャも草に負けてしまいました。しかし、花壇の花々は夏の猛暑と雨を私たち人間とともに乗り切り、それぞれに精一杯、自分たちの存在をこの大自然の中でアピールしています。カンナ、サルビア、メランポジウム、トレニア等、子供たちや訪れる人々に向けて明るく元気に花を開き、癒してくれています。環境の変化も耐えています。

そんなある日(9月29日)、朝日新聞に一つの記事が載りました。写真も小さく見出しも「西へ西へ たどりついた居場所」と目立たず見落とされた方も多かったのではないのかと思います。

恋人に裏切られて「また、人が信じられなくなつて」、10数年働いた仕事も携帯電話も運転免許証も、すべてを捨てて、岐阜県から放浪の一人旅に出た。西へ西へと歩き1年あまり、宮崎県西都市にたどり着き、かつて小学校5年の終わりから1年3か月を過ごした児童養護施設の旧園舎には、見知らぬ老夫婦が住んでいた。老夫婦の自然と共生し合っている姿に引かれ居候するようになって2年になる。そんな内容です。

この青年林田浩之さん(39歳)については、実は私も2年前、「ゆうあい通信」(2017年7月10日第304号)で書いています。

ある日突然来訪し、昔、少しでも友愛園で生活したことがあると言われるので上がってもらい、色々話を聞いたのですが内容は衝撃的でした。おそらく放浪を始められたときは自殺も考えられたのではないかと。しかし、導かれるように小学校時代一時期住んだ友愛園の小学生寮に辿り着く。

「小学生寮の生活、茶臼原小学校の生活は天国だった」。彼は繰り返すそのように言われました。その頃の楽しい思い出が彼の心の支えになっていたのだろうし、孤独の中で彷徨(ほうこう)しているうちに、足は自然に西へ西へと向かったのでしょう。

彼はその時次のようにも述べられました。「県南のある街で親子4人で生活していたけれど、父親の虐待が恐ろしくて家出するようになり、小5の時に施設に入った。母親はママ母だった。小学校を卒業するとすぐに家に引き取られた。その時は家族は名古屋の方にすでに引越して、強制的に連れていかれた。その後の生活はまた地獄だった。中学校を卒業するとすぐに自立することにし、家を出た。」

今回の新聞には、「幼いころ、父から毎日のように殴られた。物心ついたときには母がおらず、食事も満足に与えられなかった。なんで、こんなひどいことをされるのか、わからなかった。」

とも書いてあります。

このような仕事を長年やっている者でも、心が冷めてしまうような話を涙一つ流さず彼は淡々とされました。おそらく長い一人旅の中で、繰返し繰返し思い出しながら、自分なりに整理されていったのでしょうか。

彼はまた名古屋まで歩いて帰るといふようなことを言って私の前を去られたのですが、実は、熊本方面まで行ってまた戻り、元小学生寮の高見乾司さん、横田康子さん宅に住み続けられたのです。私が知ったのは、いくらか時がたってからで、その時の彼の希望に満ちた顔を見て安堵しました。

この記事を書かれた朝日新聞東京本社編集委員東野真和氏と、どこで知り合ったのかはナゾです。不思議なめぐり合わせです。私に言わせれば、石井十次か神様のお導きです。

おそらく林田さんは、高見さん、横田さんから、この自然に関することを多く学び取り、この茶臼原の自然の守り人の一人になってくれることなのでしょう。そして、保育園や児童養護施設の子供たちの感性を育てるにおいて、なくてはならないスタッフの一人に成長してくれるだろうと、私は期待しています。彼の心が臨界点に達するまで、私はじっと待つつもりです。

さて、ここから「ソーシャルアクション②」の話に入ります。先月の「ゆうあい通信」で、署名運動への御協力・御支援を呼びかけさせていただきました。お騒がせしてすみません。都道府県の「ビジョン」にそった推進計画が今年度中に出そろう前に、何らかのアピールをしておかねば、日本の社会的養育・養護が大混乱におちいって行く。そういう危機感を感じているが故の行動です。放置することは、私にとっては石井十次への裏切り行為です。石井十次セミナーのシンポジスト、叶原土筆先生、潮谷愛一先生、藤野興一先生、菊池義昭先生、共通の思いです。

さっそく、お名前がずらっと記入された署名用紙が次々に送られて来ています。お一人で50名分の署名を集めてくださった方もいます。感謝です。

御指摘も色々いただいています。不馴れな故のミスもありました。お許してください。

- ・「現在の公式文書はA4判である」。前回の「ゆうあい通信」はB5判でしたので、今後はA4判で集めたいと思います。B5判でも無効とはなりませんので、提出する時は一緒に綴じさせていただきます。
- ・「要望書と署名欄とが分離しないように」。確かにそうでしょう。表と裏にするかA3の用紙の左右にするかにしたいと思います。
- ・要望書の書き出しの部分、平成29年を2018年としたり、要望事項の一の乳幼児が乳児院となっていたり等初歩的ミスもありました。これについては、訂正させていただきました。
- ・「締切りはいつか」。できれば12月末には厚労省大臣に提出したいと思っています。また署名の数はとりあえず1万人としたいと考えています。石井十次の岡山孤児院の賛助会員の数が1万人でしたので、その数字を目標としたいと思います。1万集まれば、何かがおきそうな気がしています。「100匹目のサル」の現象」を期待しています。

石井記念友愛社の後援会員が1000人ですので、1人10人ずつ集めてくださればすぐ1万人となります。石井記念友愛社だけでも1万人は不可能な数ではないと考えています。12月末が不可能な時は2月中になるかと思っています。おそらく3月には、各都道府県で推進計画が発表されるでしょうから、それ以前に提出しておく必要があります。

10月、11月が勝負です。国民の皆様、よろしくお願い致します。これから色んな団体にもお願いしていきたいと思っています。

ソーシャルアクションにとってもう一つ重要なのが、議会対策です。すでに、宮崎県の県議会のある方にお会いして、この要望内容に関することを県議会としても厚労大臣への意見書として議決してほしいとお願い致しました。さらに、石井十次の生誕の地高鍋町と石井十次終焉の地木城町の町議会の議長さんにお会いし、県議会と同じように議決してほしいとお願い致しました。周辺市町村にもこの輪の波は広がってほしいと願っています。

最初に林田浩之さん（39歳）のことを書かせていただきました。最近おきる子供の虐待死事件と彼の人生とを重ねながら、また人間の尊厳について考えさせられています。言わば彼は虐待地獄からの生き残り人間です。彼は最近の子供の虐待死事件についてどうとらえているのだろう。そして、この実名入りの新聞取材をどう受け入れたのだろう。さらに、「新しい社会的養護ビジョン」をどう評価しているのだろう。様々な疑問に彼はこう答えてくれました。

「自分の場合、一週間家でご飯を食べないことも普通だった。だから学校の給食はありがたかった。小1、2の頃の健康診断には栄養失調と書かれてあった。友愛園に来て自分は救われた。虐待が進むと、子供は思考停止の状態となり、黙るしかなくなる。するとさらに虐待はエスカレートしていく。そうなる前に友人や身近な大人たちに具体的にどういう状態なのかを訴えてほしい。

新聞取材は、虐待関係の大人たちに目を覚まさせるものにしてほしかったので実名としてもらった。実名を出しても、自分にとっては何のデメリットもない。

自分の体験から言うならば、『ビジョン』を作った関係者は海外のデータだけを見て現場を見てない。アメリカは移民国家であり、他人を家に受入れることにそう抵抗もない。日本は文化が違い血が大事にされている。100年くらいかけて改革をやるのならよいが、10年でやるという感覚はおかしい。自分の家庭は16歳になった時も変わらなかった。あらゆること我慢したし、夢は一斉持てなかった。それで高校に行かず家を出て就職した。」

「ゆうあい通信」を毎月読んでくれているという彼は、冷静に彼なりに分析していました。もちろん彼も署名活動を始めることに同意してくれました。家庭内の虐待という病がいかに深刻なものであるのか、またその改善がいかに困難なものであるかを、彼の人生そのものが教えてくれています。その避難場所として、また親に代って愛情を注ぎしつけする場所として、やはり施設は今まで通り必要なものなのです。入所を制限したり、期間を限定すれば、救えるものが救えなくなっていくます。私は御縁を感じた東野真和氏にも手紙を書きました。もちろんマスコミとして御支援いただきたいと訴えるためです。どういう結果になるかわかりませんが、ここにその手紙の全文を載せさせていただきます。東野様、お許してください。

拝復

この度は、林田浩之君のことを、新聞で取りあげていただき、ありがとうございます。一人の人間の尊厳というものを感じますし、改めて我々の仕事の責任の重さを自覚しております。

先日、鹿児島で4才の子供が虐待死しました。マスコミは児童相談所が早く一時保護しなかったことを責めました。しかし、林田君の家庭のように、現実には甘くなく、一時保護したからと言って問題がすぐに解決するようなケースは少ないと思います。その4才の子を一時保護したとしても、親子関係を再構築するまでには多くの時間を必要とするでしょう。

結局その子は、児童養護施設等で生活することになります。今まで児童養護施設等で多くの命が救われてきたのだと思います。林田君もその一人だと思います。

ところが、厚生労働省は、この言わば文化を大きく変えようとしています。2年前に出され

た「新しい社会的養育ビジョン」が革命的で、日本の里親委託率をアメリカ、イギリス並に70%以上に上げようとする計画です。言わば世界標準並にしようとするものです。日本の里親委託率は現実には10%代ですので、革命的な政策の転換をしない限りむづかしいでしょう。

そこで、乳幼児については施設入所を停止するとか、施設生活を1年以内にするなど、施設否定の価値観をこの中に持ち込みました。実際は、アメリカ流の価値観を持った学者たちが作ったものを、当時の厚労大臣が辞任する前日に強引に発表しました。

現在、このビジョンにそって、各都道府県がそれぞれに推進計画を検討中で、今年度中には決めることになっています。里親委託率を上げることは悪いことではありません。家庭、家庭的環境の中で子供たちが生活できることは幸せにつながります。

しかし、委託率を上げようとするために施設の存在を否定することは許されることではありません。「ビジョン」を読んでいただきたいのですが、石井十次を初め多くの先人たちが築いて来た福祉文化に対する敬意といったものは、微塵も感じられません。このような社会的養育と言ったものが上からの政策だけでやれると思いきや、こころが恐ろしい。

アメリカの里親委託率は確かに70%を越えています。しかし、現実には、平均2年間くらいしか里親宅には子供はいない。里親が職業化し低所得者層が多くやっている、崩壊しているの日本はマネをするなど、昨年呼んだアメリカ人の講師は忠告されました。

日本の乳児院や児童養護施設が力を無くして今後なくなっていけば、被虐待児童の逃げ場がなくなり、アメリカと同じように多くの子供たちが里親や施設を漂流することになるでしょう。とても素人である里親だけが受け皿になることはできません。“虐待難民”と呼ばれるような子供たちを作っていくのではないかと心配しています。

そこで、全国展開で署名活動を始めることにしました。林田君は1年3か月しか施設にはいなかったのかもしれませんが、その時いた職員たちは、家族のように寝食を共にしたのです。その経験によって、彼は人生におけるあたり前の価値観を手に入れることができたのです。日本の児童養護施設には、それなりの歴史と文化があります。欧米人に比べれば日本の職員たちは情的であり利他的で子供たちにつくします。すべての施設がそうとは言えませんが、グローバル化の名のもとにそれらの文化を捨ててしまったら、子供たちの再生の場はなくなってしまいます。

東野様が林田君のことを記事にしようとしたのはなぜなのでしょう。人を育てるその文化と人を癒すこの大自然に魅力を感じられたからではないでしょうか。

児童養護施設の子供たちの多くは、虐待やネグレクトが理由で入所して来ます。彼らは施設で親の力は借りなくても、たくましく育ち、生活習慣や生きる力を身につけ、社会に自立していきます。職員たちは社会の片隅で黙々と子供たちに愛情を注ぎまたしつけて、子供たちの成長に関わっていきます。永々と行われて来たことです。林田君も、今後、子供たちの養育に関わるスタッフの一人になると信じています。

私たちの署名活動に何らかのお力をお貸しいただきますようお願い致します。

ありがとうございました。

10月3日

敬具

石井記念友愛社
児嶋草次郎

朝日新聞編集委員
東野真和 様